

論文内容の要約  
Dissertation Summary

青年期初期における両親への同一視の意味

The Meaning of Identification with Parents in  
Early Adolescence

国際基督教大学 大学院  
教育学研究科提出博士論文

A Dissertation Presented to  
the Division of Education,  
the Graduate School of International Christian University,  
for the Degree of Doctor of Philosophy

荻本 快  
Ogimoto, Kai

2015年4月24日

April 24, 2015

## 目次

第1章 問題

第2章 目的

第3章 研究手続き

第4章 青年期初期の性別同一性一測定尺度の作成一

第5章 本調査

第6章 総合考察

第7章 結論

引用文献

## 第1章 問題

11歳から13歳は、少年少女が大人への路を歩み始める時期である。時に大人に対して「ウザい、あっちにいけ」と言うかと思えば、また次の時には「お父さんは弟のことばかりヒイキする」と言う。この時期には「一個の大人としてふるまいたい、でもまだ甘えたい」という独立と依存の葛藤を体験する。

Besser & Blatt(2007)は、青年期初期における「同一視編成不全」の理論を提唱し、調査研究を行った。同一視編成の不全は「青年期初期に同性親への同一視の凝集を行わずに、異性親を理想化すること」と定義されている。彼らは、青年期初期における異性親への優勢な同一視が、男子の外向的問題（非行・攻撃的行動）と、女子の内向的問題（不安、身体症状）に関係することを示した。その上で、同性親への優勢な同一視が性役割同一性(sex-role identity)の発達を促進されるとし、男子の成果による自らの定義と、女子の親密性における効力感に寄与することを推察した。Besser & Blatt(2007)の独自性は以下の5点である。a)青年期初期(11-13歳)に着目したこと。b)この時期に独立と依存が葛藤することに注目したこと。c)同一視機制に主眼を置いている。d)父-母-子の三者関係に焦点をあてている。e)父親表象と母親表象を比較することで同一視の様態を実証的に検討している。

しかしながら、Besser & Blatt(2007)には下記の課題も指摘される。a)同一視が性役割同一性に与える影響について推察しているが、それに関する調査を行っていない。b)性役割同一性だけでなく、性的同一性(sexual identity)への影響も検討する必要がある。c)同一視機制についての論考が不十分である。d)青年期初期の同一視の様態は、同性親への優勢な同一視か異性親への優勢な同一視という2様態だけではない。Al-Yagon(2011)やGitanjali(2013)、荻本(2009)から、この時期のどちらかの親への優勢な同一視だけでなく、父親と母親の両親に対する均等な同一視が示唆され、これについても検討していく必要がある。

## 第2章 目的

- 1) Besser & Blatt(2007)が問題にした異性親への同一視, 同性親への同一視に加えて, 両親への均等な同一視を同時に抽出しながら検討を行うことで, 彼らの示した異性親への同一視の外向的問題と内向的問題の影響が, これらの同一視の3様態の比較でも見られるかどうか明らかにする.
- 2) 同一視の要因と共に性別を要因に加えて検討を行う. Al-Yagon(2011)と Gitanjali(2013)では考察されなかった両親と性別のダイナミクスが外向的問題と内向的問題に与える影響について明らかにする.
- 3) 「成果による自らの定義」と「親密性における効力感」といった青年期初期の性役割同一性に与える影響を検討する. Besser & Blatt(2007)によって提唱された, 同性親への同一視がもつ性役割同一性への発達促進的な影響を実証する.
- 4) 性役割同一性と共に性的同一性に与える影響についても検討することで, Besser & Blatt(2007)が提唱した同性親への同一視の発達的影響が性的同一性についても見られるかどうか明らかにする.
- 5) 両親への均等な同一視を含めた同一視の3様態が, 性役割同一性と性的同一性に与える影響を検討することで, 両親への均等な同一視のもつ, 性別同一性(性役割同一性と性的同一性)の発達における意味を明らかにする.
- 6) これらの実証的検討の成果に基づき, Besser & Blatt(2007)によって提唱された理論の真偽を問う. そして, 青年期初期の依存と独立の葛藤に際して, 両親への同一視が如何なる意味をもつのか, 性別特異的な問題(外向的問題・内向的問題)と性別同一性(性役割同一性・性的同一性)に与える影響という観点から, 青年期初期発達理論を再構築する.

## 第3章 研究手続き

本研究では, Besser & Blatt(2007)を批判的に検討していくために, 先行研究(Al-Yagon, 2011; Besser & Blatt, 2007; Gitanjali, 2013)に則り, 調査研究法を採用した. 第1章に基づき, 同一視の様態を抽出する方法について

て、Besser & Blatt(2007)の方法を修正して実施した。外向的問題と内向的問題については、先行研究と同じ方法をとった(Achenbach, 1991a, 1991b; 倉本・上林・中田・福井・向井・根岸, 1999)。本研究で新たに試みる、同一視が性別同一性に与える影響については、青年期初期の性別同一性を測定する尺度を次章で作成した上で実施した。

#### 第4章 青年期初期の性別同一性—測定尺度の作成—

青年期初期における性的同一性と性役割同一性からなる性別同一性を抽出する尺度、青年期初期性別同一性尺度 Early Adolescence Gender Identity Scale(EAGI)を開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。本研究では、青年期初期の性別に関連して発達する同一性として、青年期初期の生物学的性(sex)に基づく、性器性の統裁の感覚と、異性愛指向からなる同一性を Blos(1962)に基づき、性的同一性(sexual identity)とした。また、Besser & Blatt(2007)に基づき、男性性と女性性という二つの性役割(sex role)を統合する同一性を、Bem(1974), Chevron, Quinlan, & Blatt(1978), Kohlberg(1966)に基づき、性役割同一性(sex-role identity)とした。これらを統合する同一性を、精神分析的発達理論(Freud, 1905/1925), および Tyson & Tyson(1990)と Stoller(1968, 1976)に基づき青年期初期の性別同一性(early adolescent gender identity)と呼び、以下のように定義した。「青年期初期の男性性と女性性という二つの性役割から成る性役割同一性と、思春期(puberty)の生物学変化に伴う性器性の統裁の感覚と、異性愛指向からなる性的同一性を統合する同一性」

#### 方法

参加者 中学校1年生209名(男子101名, 女子108名)。年齢の内訳は12歳が102名(48.8%), 13歳が106名(50.7%), 無記入が1名(0.4%)だった。

手続き 青年期初期の性別同一性を測定する質問紙項目を開発し、質問紙項目を青年期初期男女に実施し、因子分析を行い、概念的妥当性を検討した。

さらに、開発した質問紙の下位尺度の妥当性を検討するために、①学校生活適応感尺度(高瀬・内藤・浅川・古川, 1986)の中でも「学習意欲」「友人関係」「教師関係」「特別活動への態度」、②自尊心尺度(Rosenberg, 1965; 山本・松井・山城, 1982), ③児童用抑うつ自己評価尺度(DSRC, Birleson, 1981; 村田・清水・森・大島, 1996), ④土肥(1996)によって開発された青年期後期のジェンダーアイデンティティを抽出する尺度「ジェンダーアイデンティティ尺度」(土肥, 1996)を実施した。

## 結果と考察

因子分析の結果、4因子が適切であると判断され、それぞれの因子は本研究の構成概念である性役割同一性の「成果による自らの定義」と「親密性における効力感」および性的同一性の「異性愛指向」と「身体的変化の受容」を反映した項目構成となった。尺度の信頼性も一定の水準で認められた。

作成した下位尺度「成果による自らの定義」「親密性における効力感」「身体的変化の受容」「異性愛指向」ごとの、ジェンダー・アイデンティティ尺度、学校生活適応感尺度、児童用抑うつ自己評価尺度、自尊心尺度との相関係数の検討により、EAGIがある程度の収束的妥当性と基準関連妥当性をもっていることが示された。また、本研究の結果では、性役割同一性の下位尺度と性的同一性の下位尺度は正の相関が示された。性役割同一性と性的同一性の関連が見出された。また、EAGIの下位尺度と他の尺度の相関を調べた結果、男子と女子の結果が大きく異なっていた。特に、性的同一性の「身体的変化の受容」について、男子は学校生活の適応感、自尊心、抑うつの低さと相関していたが、女子では無相関であった。女子は男子とは異なり、自身の身体的変化を受容していることが、学業や友人関係といった社会的な諸相には現れず、精神的健康とも関連がないことが示された。

## 第5章 本調査

青年期初期の記述する父親表象と母親表象に現れる両親への同一視と性

別の要因が、青年期初期の外向的問題・内向的問題と性別同一性（性役割同一性と性的同一性）に与える影響を検討することで、Besser & Blatt(2007)の理論を批判的に検討し、青年期初期の両親への同一視が、性別特異的な問題と同一性発達に与える影響について考察した。

Besser & Blatt(2007)の論に拠ると、依存と独立の葛藤の中で、同性親に同一視せず異性親に同一視することは、男子の外向的問題と女子の内向的問題の発現に影響する。葛藤を同性親への同一視によって解決するものは、青年期初期の性役割である男子の成果による自らの定義を促進し、女子の性役割である親密性における効力感を促す。また、本研究は、青年期初期の両親への同一視の持つ発達の意味を明らかにするためには、Besser & Blatt(2007)が提唱した性役割同一性だけでは十分ではなく、性的同一性への影響も併せて検討していく必要があることを論じていた。これまでの精神分析的な青年期発達理論は、同性親への同一視が青年期初期の性的同一性の分化に重要な役割を担っていることを示唆してきている。同性親への同一視は、青年期初期の性的同一性を構成する異性愛指向と身体的成熟の受容を促進する意味を持つと予想された。

## 方法

参加者 中学校 1 年生 514 名（男子 248 名，女子 263 名，無記入 3 名）。年齢の内訳は 12 歳が 63 名(12.2%)，13 歳が 441 名(85.8%)，無記入が 10 名(1.9%)だった。

手続き 1) 父親と母親への同一視の様態の査定は、次の二段階で行った。  
①父親と母親の記述の評定：中学生参加者による父親と母親の記述から、概念レベル(Priel, Myodovnick, & Rivlin-Beniaminy, 1995; Waniel, Besser, & Priel, 2006)を評定した。②同一視の様態の査定：父親と母親の記述の概念レベルによる群分けを行った。父親記述と母親記述の概念レベル評定値を比較し、父親記述の評定値が母親記述の評定値より概念レベルが高い者（父親に対して優勢に同一視している群：父>母群），母親記述が父親記述より

高い者（母親に対して優勢に同一視している群：母>父群）、父親記述と母親記述が等しい者（父親と母親に均等に同一視している群：父＝母群）の3群に区別した。2）青年期初期の心理学的問題（内向的問題と外向的問題）については、先行研究である Besser & Blatt(2007)と同じく、Youth Self Report (Achenbach, 1991a, 1991b; 倉本ら, 1999)の中から、内向的問題(32項目, 最大値 96, 最小値 32)と外向的問題(29項目, 最大値 87, 最小値 29)に関する項目群のみを実施した。3）前章で作成した「青年期初期の性別同一性尺度(EAGI)」を実施した。

## 結果と考察

第2章 目的に沿って本研究の成果を整理する。

1) Besser & Blatt(2007)の示した異性親への同一視の影響は、男子の外向的問題に対しては見られるが、女子の内向的問題については見られないと言える。むしろ、両親に対する均等な同一視に、外向的問題や内向的問題を抑制する効果があることが見出された。

2) 外向的問題について、青年期初期の心理学的問題が現れる要因を検討していく際には、同一視の様態だけでは充分ではなく、性別の要因も関係していることが明らかになった。

3) Besser & Blatt(2007)の論を裏付ける結果は得られなかった。むしろ、男女ともに母親への同一視が「成果による自らの定義」に関係していた。母親への優勢な同一視の背景に父親の物理的・心理学的不在があることが示唆され、実際の親がどのような性役割をとっているかが要因となっていると思われる。

4) 同性親への同一視が性的同一性に関係するという予想を支持する結果は得られなかった。むしろ男女共に異性親への同一視が性的同一性の異性愛指向に関係していた。女子の父親への同一視に起因する異性愛は年齢相応であり、異性愛指向を通して性別同一性を発達させていくことが見出された。

5) 両親に対する均等な同一視は、性役割同一性と性的同一性の発揮を抑制

することが明らかになった。

6) Besser & Blatt(2007)によって提唱された理論のうち、本研究で実証されたのは一部だった。両親表象がより高度に凝集している男子において、異性親への同一視が外向的問題に関係する。Besser & Blatt(2007)が提唱した原理である、青年期初期の依存と独立の葛藤における性別特異的な問題（外向的問題と内向的問題）と性別同一性に対して、性別と両親への同一視の3様態のダイナミズムが果たす役割が大きいことが、本研究で認められた。異性親への同一視（異性親表象が同性親表象に比べて凝集していること）が異性愛指向に関係している点から、両親表象には同一視機制だけでなく、対象関係（エディプス葛藤の再燃）も現れることが示唆された。本研究からさらに Besser & Blatt(2007)が示した原理の真偽を問うためには、同一視機制の結果として生じる表象だけでなく、同一視機制そのものを検討していく必要がある。

## 第6章 総合考察

本研究における注目すべき結果として、第一に、両親への均等な同一視（父＝母群）は外向的問題と内向的問題を抑制することがある。父親と母親に対する均等な同一視が持つ、問題行動（外向的問題・内向的問題）を抑制する意味が浮き彫りになった。Blos(1984)は、二者関係と三者関係が並行して発達することを理論的に指摘している。また、Heuves(2003)も、青年期初期は二者関係布置と三者関係布置が揺動する時期であると説明し、この時期の三者関係布置が青年の内省能力を育むことを主張している。両親への均等な同一視は、青年期初期に観察され、どちらかの親への優勢な同一視と並行して発達すると考えられる。両親への均等な同一視は、父親表象と母親表象の凝集の程度を等しく保つことで、表象世界における三者関係布置を形成しようとする同一視の様態であり、青年期初期発達における注目すべき同一視の様態である。

また、男女ともに、異性親への同一視が、異性愛指向に関係していた。

特に女子については、第4章で、女子のEAGIの女子のEAGIの「異性愛指向」と「性の受容」(土肥, 1996)が正の相関を示しており、女子は異性愛指向を通じて自らの社会的な性と生物学的な性を受け入れようとしていると思われた。これらを踏まえ、女子は父親への同一視を通じて異性愛指向を発達させ、自らの女性性に開かれていくと思われる。本研究は、Besser & Blatt(2007)にならい、父親表象が母親表象に比べて凝集していることを「父親への同一視」として扱った。この結果を、エディプス葛藤の再燃(Blos, 1962)によって女子が父親に愛情を向け、異性愛指向が発達したと考えることもできる。

## 第7章 結論

### 青年期初期発達理論の再構成

青年期初期には、青年は依存と独立の葛藤を体験する。この葛藤に対して、青年は両親に対する均等な同一視を形成することで、依存と独立の葛藤を行うための自己省察能力を得る。そのため、青年期初期特有の問題である外向的問題と内向的問題は共に抑制される。依存と独立の葛藤に対して、親のどちらかに同一視することは、性別同一性の形成を通して葛藤を克服しようとする路へと進んだことを意味する。性的に子どもの自分から、性的に大人になっていく自分に直面する危機に瀕する。それ故に、どちらかの親に同一視することは、男女ともに内向的問題に関係し、男子にとっては外向的問題に影響する。女子が父親に同一視することは、年齢相応の異性愛指向を体験し、異性愛指向を通して女性性を検討する路へ入っていくことを意味する。その一方で、男子が母親に同一視することは、早急な異性愛行動に関係すると考えられる。両親への均等な同一視は、外向的問題と内向的問題を抑制するが、それと同時に性別同一性の発達も抑制される。どちらかの親への同一視は、成果による自らの定義や異性愛指向を通じた性別同一性の検討を押し進めるが、それによる青年期初期の危機に関係し、外向的問題や内向的問題に影響する。

## 提言

本研究は、両親への均等な同一視という、これまで理論研究でも調査研究でもあまり取り上げられてこなかった同一視の様態が、青年期初期の発達において着目すべきであることを浮き彫りにした。両親への均等な同一視が、外向的問題と内向的問題を抑制する効果があることは、思春期・青年期への臨床心理学的介入はもとより、精神科臨床や、非行臨床、矯正教育にも資する知見である。

心理学研究の歴史において、両親への同一視と性的同一性の関係は、一時期は盛んに検討された。しかしながら、特に日本では両親像についての研究も、性的同一性を構成する身体的成熟の受容と異性愛指向についての研究も、敬遠されている。その中で本研究は、青年期初期の発達を理解していくためには、青年が認知する両親像も性的同一性もどちらも検討していく必要があることを示した。特に女子の父親への同一視が異性愛指向に影響し、異性愛指向を通して女性の性別同一性を育むことが示されたことは、女性性の成熟の発達の理解や、現代における女子教育を構成していくためにも、着目すべき結果である。

## 引用文献

- Achenbach, T. M. (1991a). *Manual for the youth self-report and 1991 profile*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.
- Achenbach, T. M. (1991b). *Integration guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.
- Al-Yagon, M. (2011). Adolescents' subtypes of attachment security with fathers and mothers and self-perceptions of socioemotional adjustment, *Psychology*, **2**, 291-299.
- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.

- Besser, A. & Blatt, S. J. (2007). Identity consolidation and internalizing and externalizing problem behaviors in early adolescence. *Psychoanalytic Psychology*, **24**, 126-149.
- Birleson, P. (1981). The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self-rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **22**, 73-88.
- Blos, P. (1962). *On Adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
- (ブロス, P. 野沢栄司(訳). (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- Blos, P. (1984). Son and father. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **32**, 302-324.
- Chevron, E. S., Quinlan, D. M., & Blatt, S. J. (1978). Sex roles and gender differences in the experience of depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 680-683.
- 土肥伊都子 (1996). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, **44**, 187-194.
- Freud, S. (1925). Three essays on the theory of sexuality. In J. Strachey (Ed. & Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (Vol. 7, pp.123-246). Retrieved from <http://www.p-e-p.org/> (Original work published 1905)
- Gitanjali, N. (2013). Differences in internalizing and externalizing problems among early adolescent subtypes based on attachment security. *Psychological Studies*, **583**, 122-132.
- Heuves, W. (2003). Young adolescents: Development and treatment. In V. Green. (Ed.), *Emotional development in psychoanalysis, attachment theory and neuroscience, creating connections*. (pp.183-201). East Sussex: Brunner-Routledge.
- Kohlberg, L. A. (1966). A cognitive-developmental analysis of children's

- sex role concepts and attitudes. In E. MacCoby. (Ed.), *The development of sex differences*. (pp.82-175). Stanford: Stanford University Press.
- 倉本英彦・上林靖子・中田洋二郎・福井知美・向井隆代・根岸敬矩 (1999). Youth Self Report (YSR) 日本語版の標準化の試み —YSR 問題因子尺度を中心に—. *児童精神医学とその近接領域*, **40**, 329-344.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病—Birleson の小児期うつ病スケールからの検討— *最新精神医学*, **1**, 131-138.
- 荻本快 (2009). 前思春期における同一視編成 consolidated identification の再検討 第 28 回日本心理臨床学会発表論文集, 212.
- Priel, B., Myodovnick, E., & Rivlin-Beniaminy, N. (1995). Parental representations among preschool and fourth grade children: Integrating object relational and cognitive developmental frameworks. *Journal of Personality Assessment*, **65**, 372-388.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Stoller, R, J. (1968). *Sex and gender: On the development of masculinity and femininity*. New York: Science House.
- Stoller, R. J. (1976). Primary femininity. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **24**, 59-78.
- 高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 (1986). 青年期の環境移行と適応過程(1)—質問紙の作成— *日本教育心理学会総会発表論文集*, **28**, 556-557.
- Tyson, P. & Tyson, R. L. (1990). The developmental process. In *Psychoanalytic theories of development: An integration*. New Haven: Yale University Press.
- (タイソン, P.・タイソン, R. L. 馬場禮子(監訳). 内田良一・黒田浩司・

鈴木淑元・西河正行・村部妙美(訳). (2005). 精神分析的発達論の統合①  
岩崎学術出版社)

(タイソン, P.・タイソン, R. L. 皆川邦直・山科満(監訳). 中康・遠藤幸  
彦(訳). (2008). 精神分析的発達論の統合② 岩崎学術出版社)

Waniel, A., Besser, A., & Priel, B. (2006). Mother and  
self-representations: Investigating associations with symptomatic  
behavior and academic competence in middle childhood. *Journal of  
Personality*. **74**, 223-266.

山本真理子・松井豊・山城由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造  
教育心理学研究, **30**, 64-68.